
ミルドタウン 銀色のリース

akuhoshi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミルドタウン 銀色のリース

【Nコード】

N5040Z

【作者名】

akuhoshi

【あらすじ】

憶喪失者だけが住む町、ミルドタウン。この町唯一の探偵、ミモリが風邪を引き、ギーが代役をかって出る。こここのところ毎日ミモリは街の北はずれの住宅地に通っていたようだが、その目的は？

ミルドタウン (<http://ncode.syosetu.com/n7105y/>) のクリスマス短編です。pixivにも同じ内容のものを掲載しています。

思い出せることと、思い出せないことがある。

俺の場合、思い出せないことは、どこかにしまったままなくしたりモコンのようなものではなく、

粉々に粉碎されているから、それは取りつく島もなくて、二度と意識の上に浮かんでくることもない。

過去は断片的で、ときどき痛いぐらいのメッセージを送ってくるのがわかって、壊れたビデオ・テープを手に呆然と立ち尽くすほかにない。そして、当のビデオデッキが壊れてなくてよかったな、と思う。

俺が、正気のまま取り出すことのできる記憶のワンシーンがある。

そこは寄宿舍のある古めかしい田舎の学校で、俺は半ズボンをはかされている。そして榆の木の下で友だちと話をしている。俺が、いつまでもこんなふうにしてられるんじゃないかな、と、そんな感じのことを言うと、友だちは笑って、笑いながら、誤りを静かに指摘する。そんなことはないよ、と。

そんなことはないよ、僕たちはもっと些細なタイミングで別れてしまっただろうし、決定的にすれ違って、時間が経てば経つほど離れてしまっただけ、でもその先があるんだ。

この記憶の不思議な点は、そういうことを言っているそいつの顔が自分とそっくりだということだ。

俺はときどき、頭の中だけにあり、現実のどこにもないキッチンの緑の引き出しから、この記憶が入ったテープを取り出してデッキに入れ、やっぱりこのビデオテープも壊れているのかな、と残念に思っただけ、また引き出しにしまう。それともデッキのほうかな、と考えて、少しだけ寂しくなる。そういう作業をする。

俺はこういうことを考えている。いつもだ。でもそのことを他人に話したりはしない。

誰も知らない方がいいんだ。
伝わらないから。

*

ミモリと暮らす、と提案したとき、クレアは嫌そうな顔をした。
クレア。ケントルム中央病院に勤めるまじめな精神科医は、俺と
のカウンセリングのときだけは煙草を吸うことがゆるされると思っ
ている。仕方がない。彼女のふるまいに腹を立てたりはしない。何
故なら彼女のカウンセリングルームに行くのは嫌だと駄々をこねて
いるのは俺で、仕方なくふたりとも院内の喫煙スペースにいるのだ
から。

「わかつてるの？ あの子は、言ってみれば4歳児よ」

この街に来てから知りあったミモリは、ミルドタウンに住む探偵
だ。探偵の、友人だ。

彼は街に来る前のすべての記憶を失っている。これは、考えよう
によっては俺よりもずっと深刻な状態だ。あるのはミルドタウンに
移ってから4年分の記憶だけ。それっぽっちの記憶のストックで生
きて行くことがどんなことか考えてみればいい。ある人は赤ん坊に
は何も無いというかもしれない。でも赤ん坊は18歳の少年とはち
がう。ミモリは18歳の少年だった。

「わかつてるよ」

「どういうつもりなの？」

「かわいいミモリに傷をつけるつもり？ ってこと？ それはない」

「それならいいのよ」と、クレアはなにか本気で言っていたと思う。
彼女は、コーヒーを右手でかき混ぜるのか左手で混ぜるのか、そ
んなことまで忘れていたのに、よく回復したものだ……ミモリは貴
重な症例だ、とでも考えているに違いないからだ。

「でも、そうね。わからないわ、それっていいことなのかしら」

「俺に聞くなよ、立場が逆だ」

「不安定だわ。大きな事件があった後でしょ」

「大きな事件って？ …… ああ、あれか。ジュリの……」

「あなたにとつては、そんなものでしょうけど。ミルドタウンがあるな事件に巻き込まれたのは私の知る限りはじめて」

「ミモリは平気そうな顔をしてたぜ」

「ダメージを実感するのが遅いだけよ。ミモリは基本的にひとりでいたほうがいいと思ってるわ。その証拠に病院にいたときはちっとも回復しなかった。彼の場合、ひとりのほうが安定して、かえって物事を深く考えられるようになるのよ」

それは少し違うんじゃないかな、と俺は思ったが、口には出さない。彼女は高度な信頼を求めるが、同時に俺を試してもいる。ときどきは試験をやりすぎなければやっていけない。とくに試験問題が悪かったときだ。友達に関するテストなんて受けたくない。もしその試験の成績が悪かったとしても、彼女に謝罪して追試の申し込みをするのは馬鹿げたことだ。

「とにかく……ミモリの言う通り、冬の間だけ、まずはお試しってやつだよ」と俺は言った。

「恋人みたいに言わないで」とクレア。

「部屋をシェアするだけさ」

「最初からそう言って」

彼女は白い手の平を差し出した。「日記」

彼女の手の平に、渋い緑色のノートを乗せる。

「あなたの日記は嘘ばかり。とても薄っぺらい」

「たまたま、利き手が風邪を引いていて……」

「あとでお見舞いに行くわ」

「俺の？」

「ミモリのよ」

そうだった。俺は頷いた。いま、ミモリは風邪を引いている。

シンクの真上の棚を開けて、まだ新品に近いビデオテープをいくつか選び、デッキにそっと押しこむ。

*

ミルドタウンは特殊なコミュニティだ。そこに住むための条件はきわめてシンプル。記憶喪失者であること。

人口は公式発表では10万人、実際の数は一万人、おそらく満たない。ほぼ円形をした町の中心にケントルム中央病院がある。この病院が、行政よりもずっと重要な地位を占めている。

灰色の町は海に囲まれており外部との接触は困難だった。閉鎖型のコミュニティだから船もよりつかない。ただ、飢えることはない。これは重要なことだ。飢えることがない、ということは、いま、地球上でもっともめずらしいことのひとつだ。

俺がミルドタウンを訪れるまでの記憶は断片的だった。ばたばた音を立てるヘリのプロペラ音、テント、治療中のライト、点滴、包帯、病院、バンの荷台、そんな風景や音が、頭の中の、ばらばらのカセットテープや写真に記録されている。本来なら、ミルドタウンに住むためにはコーディネーターと話をつけ、審査を受けなければならぬ。そういう雑事は眠っているあいだに誰かが済ませていて、目が覚めたら、ほんとに、目が覚めたら、ケントルム中央病院のベッドの上だった。

ミモリと最初にどこで出会ったのか実を言うとよく覚えていない。初めはこの街の勝手というか、やり方というものが何ひとつわからなかったし、怒ってばかりいた。刷り込み記憶のせいで言語で困ったことはないが、ここでは俺は宇宙語を喋る宇宙人だ。俺の目にも、ミルドタウンの住人は宇宙人に見えた。

ミモリはその中でも、一番変わった宇宙人だ。

ミモリのアパートは街の東側にある。路面電車の架線沿いにある

古びたビルの一室だ。4年前からそこに住み、仕事で得られる報酬のほとんどを費やして本を溜めこみ、寝起きをしている。ミモリの生活には決まったパターンがある。朝、起きると、顔を洗い、コーヒーを入れてビスケットを二枚食べる。ときどき思い立ったようにサンドイッチをつくり、それをポケットに突っ込んで出かける。

今朝はそのどれもが億劫そうだった。朝食を食べるか訊くといらないといい、コーヒーをすすめるとそれもいらぬ。水を触るのもいやがる。ふらふらした足どりでいつものコートにマフラーを巻きつけて出て行こうとするので、慌てて止めたら、案の定8度の熱が出ていた。それでも行くと行ってきかないので、用件を肩代わりすることを条件に薬を飲ませるのに成功した。

クレアとの面会を済ませた後、保安官事務所に向かった。事務所には珍しくバルガドと補佐役のリドのふたりの顔が揃っていた。バルガドは昔、欧州のどこかで警官をやっていたようだ。リドも元警官だが、どうも相当におっかない部署にいらしく、バルより引鉄を引くのが早い。

ミモリが熱を出したことを伝えると、バルはでかい顔をしかめた。「そいつは可哀そうに」

奥の席で事務仕事をしていたリドが同意するように頷いた。

「で、お前さんは何をしとるんだ」

「今日はミモリの代役だよ。何か変わったことは？」

「無い。とくに……無いな、驚くほど静かだ。市政府もあれこれ調査しろと言ってこないのでもとも平和だ」

「この間の事件は片付いた？」

「まあ、ぼちぼち」

「つれないな」

「今日が何の日かわかるだろう。野暮なことは無しといこう」

「じゃあ、ここ最近、ミモリがどこで何をしていたか、仕事を請け負っていた様子があるかどうか心当たりは？」

バルはへんな顔をした。

「代理のくせに聞いていないとは驚きだ」

「39度の熱を出してる奴を叩き起こして尋問すればよかつたのか？ 手帳を拝借してきた」

「みせてみる」

「あいつの字は象形文字みたいだよ。俺がいうんだから間違いない」
「ミモリの手帳は書き込みや追加のメモで膨れている。綴じているゴムバンドを外し、最新の書き込み部分をデスクの上に広げる。そこには見開きのページをいっぱい、黒いマジックで、蛇行する線と図形が書きこまれている。線の間には等間隔に並んだ四角いマーク、マークの中にときどき、潰れた丸や星のようなものがみえた。」

「迷路みたいだな」とバルが感想を述べた。

「リドも手帳を覗きこんでいた。」
「リドは熱心に蛇行する線を目で追いかけ、いつも通り静かに閃いたようだった。」

「地図ですよ。これ……東側の住宅地のどこかじゃないかな」
「棚から地図を持ってきた。ミルドタウンは中央が高くなる。東側の住宅地、ミモリのアパートよりも北側の斜面沿いに20戸ほどのツリー上に並ぶ、見晴しのよさそうなところだ。」

「こんなところで何をしてるんだろうな。何も無いぞ、こんなところ。まったく、探偵するのは何を考えているのやら……」

「探偵の仕事って」と口を挟む。「保安官たちでも把握できないものなのか？」

「俺たちはミモリに求められたら、情報を提供しなければいけない」とリドが淡々と言った。「ただし探偵は仕事を秘密にできる、というルールがある」

「探偵つてのは、昔、汚れ仕事をしてたんだよ。ギー、お前、この街に住んでる奴がもし記憶が戻ったらどうなるか知ってるか？」

「知らない」

「追放されるんだ。それが判明した時点で、住民とはコンタクトが

とれなくなる。私物の持ちだしも、許可された物以外はダメだ。今でもそうだ」

「厳しいな。もしかして、それを見つけるのが探偵？」

「そうだ。記憶が戻ったか、あるいは虚偽の申告をしてミルドタウンに入ってきた住民を探し出して排除する。それを便宜上探偵と呼んでいた形跡がある」

「今もそんなことを？」

「いや今は医者の仕事だ。当然だろう。どうやったらミモリにそんなことができる」

そのとおりだ、と俺も思った。

記憶喪失者たちの中から、ミルドタウンに相応しくない者を探しだす。

そんな魔女裁判のような陰気な真似を平気でするような奴ではない。い。

もつとも、おかしなことならば、いくらでもしでかすだろう。

*

たとえば春に差し掛かったころ、ミモリは氷をいっぱいにしたバケツと並んで道端に腰かけていた。俺は道端に点々と転がったハーブキャンディ 例のくそまずいあれ を拾っていくうちに、ミモリをみつけた。俺はバケツを持つのを肩代わりした。目的地は無人図書館だ。司書をやりたい者がいれば無人ではなくなるのだから、貸し借りや本の整理はすべて機械でできる。三階の閲覧室の隅っこに屋上に出る梯子と跳ねあげ式の扉があって、それなりに苦勞をしてバケツを屋上に引っ張り上げると、そこには子ども用のビニールプール（蛍光ピンク）とびん入りのはちみつ入りサイダーが1ダースあった。プールの出所はわからない。サイダーのびんは、誰かから貰ったのかもしれない。あるいは、どっちも古い倉庫から探し出して来たのかも。

結局、プールのビニールは劣化していて、水を半分ほど入れた状態で破裂、バランスがくずれて、俺たちは氷水をぶちまけた。俺はミモリが探偵だなんて信じられない。少なくとも推理小説に出てくるような探偵ではない。何の武器ももたないミモリが、どうやって殺人鬼やカルト教団や世界の陰謀と戦うことができるだろうか？ それとも何か秘密があるのだろうか？

*

町の北側寄りにある高台の住宅地とやらは見晴しも日当たりもよく、どこもかしこも灰色がかったミルドタウンの中では住み心地のよさそうな場所だが、平屋の建物が並ぶ斜面をよく見ると、空家となり朽ちかけたものもある。

その配置は概ね手帳にある記述の通りだ。林を切り開いた扇状の土地に、目視で確認できるだけ、18棟の家がある。

きれいに五段に別れて配置されており、一番低い裾のところに6棟、次に高いところに5、その上に4、一番高いところに3棟、その真上に広場があり、帽子を被った男がキャンバスを立て掛けている。家はどれも似たような作りだ。天井の色もドアの色も同じ。どこかであらかじめ作ったものを運んできたのかもしれない。

階段とスロープのついた道が三本、二本は外側を巡るように、一本は住宅地の真ん中を二等分するように家と家の間を通り、公園とミルドタウンの市街地に向かう大きな道と繋いでいた。

手帳の家と思しき四角い図形に記号が書き込まれている。乱雑過ぎて何のマークなのか読みとれそうになかった。印をつけられた家は五つ。

まず下の6軒のうち公園に向かって左端の3軒、その上の段、右端と真ん中。

それにしても風が冷たい。肌にひりつくみたいだ。雪がふるだろう、今晚あたり。

ふるときはいつもこんな風になる。

誰かに話を聞けないか探していたら、ちょうど一番下の段の、左端の家の前に人影がふたつあった。

60過ぎの婦人と紳士。どちらも白人。

女性はゆったりとしたワンピースの上に暖かそうな赤いギンガムチエックのストールを羽織り、帽子をかぶっている。男のほうは、散歩帰りか、それともこれから出かけるところかもしれない。クラシクな型のツイードのコートを着込んでいた。

たぶん夫婦ではないだろう。その確率はとても低い。

おそらく隣人と立ち話をしているところだ。

ミルドタウンには家族を連れてくることはできない。

家族も記憶喪失者だというなら話は別だが、そんなケースは稀だろう。

だから必然的にこの街に来る人間は孤独なのだ。

孤独に耐えられる人間が集まるせいで耐性がさらに強まるのか、人間関係を改めて築こうという意志もなかなか働かないものらしい。男性がいなくなり、女性のほうに適当に微笑んで声をかけると彼女は警戒したようすをみせた。

でも拒否ではない。こちらの話をきこうとして重心がわずかに傾いた。

ミモリの話をだすと、彼女の表情に暖かい微笑みが浮かび緊張もとけたようだった。それどころか家の中に招かれ、暖かい飲みものまで提供された。

死ぬほど甘いココア、マシユマロ入り。

これはミモリの趣味だ。

「あのかわいらしい探偵さんは、今日は？」

ミモリはあれで18歳だが　まあ、彼女にくらべればかわいいものだろう。

「風邪を引いているんです」と答えるのは、今日は何回目だった
け？

「残念ね。よかったら、またうちに寄って行くように言ってくださ
る？ この間来たときに、ここにマシユマロを浮かべたいねって、
そんな話をしていて、ちょうど切らして残念だったのよ」

「伝えます」

やはり、ミモリはこの家を訪れていたみたいだ。素早く室内を確
認する。

これといって気になるところはない。居間には暖炉がある。外か
ら見たのでは気がつかなかった。

それは偽物の炎の熱で部屋を暖めている。暖炉の上には赤と緑の
チエツクのリボンをかけたリースが飾られていた。

「それで、ラクガキの件で何かわかったの？」

「ラクガキの件」 「俺は表情を崩さず、どうしたら話を続けられ
るか考えた。「ええ、実は手がかりが掴めそうなところなんです。
それで、お手数おかけしますが、もう一度、そのラクガキのことで
覚えていることを話してくださいませんか？ ちょっと確かめたい
ことがあるんです」

「もう一度話さなくちゃいけないの？ 同じことを？」

「ええ、どうしても。お願いできませんか？ 協力していただけた
ら、お礼をします。雪かきをしますよ」

「あら、あれって結構、力があるのよ」

「大丈夫。こう見えて100キロは持ちあげられます」

彼女は笑った。冗談だと思ったのだろう。冗談ではない。
話を聞きだすことには、成功した。お喋りが好きな性格で助かつ
た。

ラクガキというのは、ひと月前、彼女の家のドアに描かれた小さ
なマークだった。

赤いクレヨンで、星が描かれていたという。

ラクガキときいてジュリのことを思い出したが、言わないでおい

た。関係ないだろう。たぶん。

星のラクガキのことは、誰かのいたずらだろう、と思っていたが、五日ほどたって隣の家の門扉にも同じことが起きた。今度は緑色のクレヨンでギザギザの葉っぱのマークが描かれていた。ヒイラギだろう、と彼女は思った。さらに何日か経って、いわく「上の階の家」にもラクガキが描かれて、それが赤いとんがり帽子をかぶったサンタクロースだったのだ。そんな調子で、四つ目は羊、五つ目は雪だるま、と続いた。

隣の家の住人は、三つ目が描かれる前に、一応、ということ探偵に手紙を出した。保安官を呼びつけるほどのことはなさそうだと、気後れしたようだ。そしてミモリがやってきた。

話をきいていて驚いた。

ミモリはこのひと月のあいだ、ほぼ毎日、この住宅地を訪れていたようだ。

というのも、ラクガキが描かれるのは間隔があいていたし、それがいつなのかもわからない。住人たちはさほど重要とは考えておらず、消されてしまう可能性もあった。それで朝早く、空気も暖まらないうちからミモリはこのあたりを訪れラクガキを探し、住人たちと話をしていたという。

風邪をひくはずだ。

「ところで、あのリースは手作りですか？ リボンの配色がそのスタイルと同じですね」

さり気なく話題を変える。彼女はそのことに触れられて嬉しそうだ。「ええ、そうよ。といっても、私の手づくりではないの。以前、このあたりに住んでいた女の。手先が器用な方でね。きっかけは私なの。作り過ぎた料理をご近所にわけたことがあって、そのお礼にいただいたのよ。ちよつと素敵でしょ？ すぐに評判になって、このあたりの家にひとつずつ、作ってもらうことになったのよ」

「へえ……。ということは、その人にそういう特技があったことは、それまで知らなかった？」

「ええ。なんとというか、本人は飾り気の無い人で。クリスマス時期になっても、何も飾らなかつたしね。一応、宗教のことでもあるし、あまり口にするものじゃないからそれまで聞かなかつたの。あら……そういえば、この話も探偵さんとしたことがあるような気がするわ」

「すみません。でも、面白い話だから、もう少し。リースをこのあたりの家全部に、ということとは、あの一番上の広場で絵を描いている人のところにも……?」

「ああ、彼はね……」

その話になつた途端、彼女は表情を曇らせた。

*

住宅地を歩きまわり、老婦人に教えてもらった、今朝ラクガキが描かれたばかりという家を見つけた。それはある意味簡単で、ある意味極めて難しい作業だった。というのも、その家は広場に近い四段目の右端の一軒なのだが、その家だけ、壁や庭、塀にいたるまで、やたら豪華なイルミネーションに囲まれていた。光るトナカイやサンタクロースの人形が喧しいくらいに置かれている。色彩も緑と赤を基調にしている目に痛い。ラクガキを探しながら歩いていると、見過ごしてしまう。

住んでいるのは若い（といっても三十代後半だが）女性で、ごく最近、この家に越してきた人物だった。

住人ですら窓枠をこてこてと彩る発光ダイオードの下にリースの形の小さなラクガキをみつけるのは難しかったらしく、近所の人々がそのことを指摘するととても驚いたらしい。

彼女は俺を何のためらいもなく迎え入れた。その感じからすると、ラクガキが描かれると、ミモリは「事件の兆候」がないかどうか必ず家の中に入り調べていたようだ。そしてミモリは彼女とも顔見知りで、彼女のほうもラクガキがされた以上当然訪問してくるものと考えているようだった。

よって話はらくに進められた。が、ラクガキについてとくに新しい情報は得られなかった。

彼女たちはラクガキのことは悪戯程度に考えていて、深夜から明け方のことには全く注意を払っておらず、周囲の家に住んでいる人々も60歳以上の高齢者なので物音に気がついたとは到底思えない。

派手な外見に劣らず室内はクリスマスの飾りでいっぱいだった。

暖炉の上に銀色のリースがかけてあるのが目に入った。銀色のリースには、ほんのりと黄色く色づいたドライフラワーの薔薇がふたつかみつつ、いやらしくない程度にさり気なく飾られ、飾りつけの中では一番地味だが、とても好感がもてた。ぴかぴかのトナカイを非難するわけではないのだが、まあ、趣味の問題といえそうだ。

「あのリースは、もしかすると手作り？」

訊ねると、ちょっと困った表情を浮かべる。

「そうなの。でも、私が作ったわけではなくて……この家に最初からあったものなの」

「最初からというと、引越してきたときから？」

「ええ、机や筆筒、家具も大体そう。この家、住んでいた方がそのままにして出て行かれたらしくて。ええ。こまごまとしたものは処分したけれど、大多数は状態もとてもきれいだっただから、ここに引越すことにしたの。そのほうが都合がよかったのよ。パーティーと、ふたりで暮らす予定だから」

「おめでとうございます」

「ありがとう。ミルドタウンって、暗い町で馴染めないと思ったけれど、このあたりは雰囲気がいいのよね。希望がもてそうだし」

そう言う彼女はともうれしそうだった。

うれしそうなお夫婦なんて、ますます珍しい、と俺は思ったが、言わないでおいた。

ミサとアモの死体のことも思い出したが、それも忘れることにした。

「カレンダーみたいよね」

不意にカレンが呟いた。

カレンというのが彼女の名まえだ。

「どうして？　というか、何のこと？」

「あら、ごめんなさい……ただ、何となく。あのラクガキが、カレンダーみたいだなんて、そう思ったの」

「カレンダー？」

「どうしてかしらね」

彼女は不思議そうに首を傾げた。

「どうしてそう思ったのか、自分でもよくわからないわ」

*

二つ、選択肢があった。

ひとつはこのまま何もせずに帰路につく、というもの。俺は探偵ではないから、そうしてもべつに問題はないのだ。だけど、何となく、相棒に「頼むよ」と言われた気がして、俺は階段を登り、広場まで登って行った。広場にはベンチがひとつと塵箱がひとつ隅に置かれている。

キャンバスを立て掛けた件の男は、自前の折り畳み椅子に座っていた。

彼は住民たちからレスと呼ばれている。帽子の下には、怠惰な長髪と、髭と、年齢によるしわと、氷のかたまりのような瞳があった。彼はこのあたりでは有名人だ。というのも、あの、手作りリースのことで……彼はちょっとしたトラブルを起こしていた。些細なことだ。

リースの作り手は、かつてあの派手なイルミネーションの家に住んでいた。彼女が住民たちのためにリースを手作りしたとき、レスは彼女に「そんな無駄なことをするな、そんなことをする必要はない」と言いはなつたらしい。住民たちがリースのお礼にささやかなパーティを催したときも出席しなかった。もともと寡黙な人物で、周囲の住人ともコミュニケーションを取らなかつたため、確執は決定的になった。

俺は彼の隣に行つて絵を眺めたが、彼は彫像みたいに微動だにしない。

キャンバスをやめて町を眺めた。思った通り、そこから見えるのは、この住宅地と海だけだ。

この男は、キャンバスにそれらの冷たい光景を移動させる天才だ
と思った。

「思うんだけど」と俺は言った。「あんたのその絵は、つまらない
絵だな」

男は髭の下で笑い、筆を下ろした。

「ところで、ラクガキのことだけど。ラクガキをしたのは、あんた
だろ、レス」

「どうしてそう思う？」

「いや、俺は探偵じゃないから当たってようがまいが関係ない。
違うなら別の人間に訊いてみればいいだけの話なんだ。それに、も
し俺がそう質問をしたら、ラクガキをした犯人は嘘をつかないよう
な気がする」

「ふむ」

「ここらへんの家にラクガキがされてるって、それは知ってるよな。
俺なりにラクガキをする意味を考えてみたんだ。見当違いなら、忘
れてくれ」

「意味とは？」

「まっとうに考えるなら悪戯だ。だけどこのていどの悪戯で喜ぶよ
うなガキは、いない。そもそもガキつてものが町にいない。もうひ
とつ考えたのは何かの目印。だけど、これはクレヨンじゃ用をなさ
ない。そこで、カレンが言っただけのことを思い出して閃いた。カレン
……って、わかるよな。彼女、カレンダーみたいだっけって言った。
たぶん、それは、ここから町を見下ろすと……アドベント・カレン
ダーにみえたんだ。カレンの目には、この町のように。知ってる
だろ？ クリスマスまで、毎日、絵に描かれた窓をあけていく、ク
リスマスのお知らせカレンダーのことだよ」

「それで？」

「つまり、これはミモリを呼びだすための合図なんじゃないかなっ
て思ったのさ。ラクガキが続けば、探偵が呼ばれて、その家を調べ
る。ラクガキはミモリに窓を開けさせるために描いたんじゃないか

なつて」

レスはにこりともせず、椅子の脇に置いたバックパックに手を突っ込むと12色入りのクレヨンを取り出して、こちらに放ってきた。ふたを開けると緑と赤、クリスマスカラーの二色が削れていた。

「やっぱりな。どうしてくれるんだ、ミモリは風邪を引いて寝込んでるんだぞ」

「それは悪いことをしたな。うまくいくとは思っていなかった。で、どうだったんだ？ あの家、リースはあったんだろうな？」

「リース？ ……あの派手な家の？」

「あのリースは私のものなんだ」

「はあ？ だって、あんた、住人たちと仲が悪いはずだろ」

「それは連中の勝手な思い込みだ。私とセシルは友人だった。おたがい夜明け前の人気のない町を散歩するのが趣味でね」

「ふうん。じゃ、あのリースの件で、言い合いになつたのはなんですか？」

「いやあれは、リースのことを言ったんじゃない。いくら私でもくだらないことで子どものような言い合いをするつもりは無かった。あれはセシルが個人的に抱えていた問題について言ったんだ。そんなことをしている暇はない、つてな。だけど彼女は聞かなかった。残された時間はさほど長く無かった。それなのに周りの人間が呑気に喜んでいるのが気に食わなかった……要するに私は子どもだったんだ」

「矛盾してるぜ」

「そうだ。人間は矛盾している」

「どうしてミモリを利用した？」

「セシルは最後のリースを私に贈ると約束した。ただ、それが最後の言葉で、彼女はそのままいなくなってしまった。荷物も残したまま」

俺はバルガドたちの話を思い出す。

「記憶が戻ったのか……？」

「そつだ。医者たちはしばらくそのことに気がつかなかつたが、時間の問題だった。私は彼女が町に残ることができる方策を考えるべきだと思っていたが、セシルは別のことを考えていたようだ。手作りのリースをくばりはじめた。私たちはミルドタウン流というべきか、あまり近所付き合いみたいなことはしなかったんだが、それ以来、このあたりはふしぎと普通の町のようになった」

レスは話しながらバックパックからスケッチブックを取り出した。それに描かれたスケッチが彼の記憶のトリガーになっていることは疑いようもないことだ。

スケッチブックの中で、照れて、手で半分だけ顔を隠しているセシル。レスの視線から隠れながらも、好奇心に満ちた目でこちらを見つめてくる目元のしわは、思ったよりも若々しい。

描かれた人物が、紙の上で束の間の人生を楽しんでいるみたいだ。それを眺めているレスの表情も柔らかい。

彼は一瞬の彼女をそこに閉じ込めたのだ。

「そつちのは素敵な絵だ。今まで見た中で最高得点に近いよ」

「若造にいわれても嬉しいとは思わんよ」

「続きを話せよ、偏屈じじい」

「ふん。彼女が去ってしまつと、むしろようにその、完成したかどうかもわからないリースがみたくなくなつてな。正直にいうと寂しかったんだ。ただ、私と彼女が友人だったと気づいている住人はいないし、あのことがあつて連中は私を気味悪がっている。それで探偵を頼ることにした。依頼を描いたというわけだ。壁や家の扉に。事件に気がついてもらえるように、それでいて、住人たちに余計な不安を抱かせないように」

「どうしてそんなまどろっこしい方法を？ みせてくれつて頼めばいいじゃないか、ふつうに」

レスは俺を睨みつけた。

「最近ここに越してきた若い女性のところに俺みたいな人間がやって来て、あのリースは俺のなんだと言いついたら気分が悪いだろ

う。俺がしたいのは、そういうことじゃないんだよ。怖がらせたり、嫌がらせをしたり、ということではない。そこに確かにある、というところが大切なんだ」

「リースが？」

「まごころと言ってほしいね」

「ふん。それが、あんなりの気遣いつていう訳か？ ミモリの労力にあわないぞ」

「確かにそうかもしれない。だが、あの坊やは、そんなことには気がついていたはずだ。当然だな、毎日真面目に通って来るもんだから。私はさすがに可哀そうになって、手紙を出したんだ。最後の一日だけ来てくれればいいんだと。セシルの家に目的のものがあるはずだからと。彼も他人の言うことをきかなかったが。しかし坊やが来てくれたおかげで、住人たちがラクガキについてよけいなせんとくをしなくてくれたのも確かだ。俺は探偵があんな子どもだとは知らなかったが、ミモリが来て住民たちと話をして、大丈夫ですよ、というと、ふしぎと信じてしまいうらしい」

ミモリらしい。と思った。

ミモリは気が長い。話をきくのも好きだ。

「それで、どうだったんだ」と、レス。

「何がだ？」

「リースだよ。どんな形をしていた？」

「……」

俺はそのひと言でレスにひどく腹を立てた。

レスは自分勝手な奴だ。そしてミモリは、とんでもなく人が良い。だけど俺の感じた怒りは、それらのせいだけではない。

ミモリに免じて、しかたなく付き合うことにした。

レスは俺が何か言うたびに、スケッチブックに鉛筆を走らせた。そして事細かに、もっとよく思い出せといった。俺の記憶の中にある銀色のリースを、そこにそっくり移動させようというのだ。描いているときの彼は、子どものような。アドベント・カレンダーをめ

くつて、クリスマスプレゼントを心待ちにしている子どもの顔だ。

レスは最後に、リースに飾る薔薇の品種をきいた。

「品種っていわれてもな。そういう知識はないよ。あんたは詳しいのか？」

「色くらいは覚えているだろう」

「黄色だったかな」

「花の形は？」

「わからない」

「ふん、役に立たない。花の大きさは大きかったか、それとも、小さかったか」

小さかった、と答えると、レスは黙ったまま、それ以上は何も聞いてこなかった。

「どうして黙ってるんだ」

スケッチはもうほとんど完成している。

彼はやはり天才だ。俺が見たままのリースが、そこに完成しつつあった。あとは薔薇だけ。

彼は俺が知らないだけで高名な画家か、それとも、正確な手配書の似顔絵を描く警官だったかもしれない、と思った。

レスは遠い目をして、言った。

「いま、さよならを言われたんだよ」

「セシルに？」

「いや、このリースに」

「芸術家のいうことは、意味がわからない。なあ、俺はもう帰るよ」「そうしてくれ。放っていてくれ」

俺はこれ以上ここにいても無駄だと悟った。

レスの帽子の下の灰色の瞳は、また、他人を寄せつけないものになっていた。

それは氷ではなく、溶けだしたしずくのためだった。

*

ミルドタウンでは宗教というものを慎重にあつかう。爆発物として。

少ない人口で国籍は多岐に渡っている、この街にとってそれはナイーブな問題なのだ。

でもクリスマスになると町は「それとこれとは話が別」という雰囲気になった。夕方、ミモリのアパートに戻ると誰かがレコードをきいている。どこかの部屋からクリスマス・ソングが聴こえてきた。ダンスフロアに似た緑色のリノリウムの床に人の影。

部屋のドアを開けて、隣人のマーシャが現れる。

「お帰りなさい、ギー」

「マーシャ、ミモリの様子は？」

「薬のおかげで熱は落ち着いた。食べる元気はあまり無いみたいね」

「それはいつもだけど、いろいろありがとう。今日はもういいよ、感染したら大変だ」

「あなたもね」

「俺は風邪をひいたことないんだ。たぶん」

「冗談を言ってる場合じゃないわよ。ギー、食事は？ まだでしょう？ 後で何かもっていくわ」

「おかまいなく」

マーシャは、ばたんと音をたてて、隣の部屋に入っていった。

俺の言うことなんか聞いちゃいない。

彼の寝室は埃のにおいがする。

ミモリがためこんでいる本の山のせいだ。寝室には本とベッドしかない。しかも本棚が有効に使われているかというところでもなく、できる限り乱雑に収納されている。表紙が折れ曲がってもお構いなし。

図書館職員の敵、ミモリはベッドの上でしずかに寝息をたてていた。

まるで子どもみたいに小さな顔だ。汗のついた白い額に、薄い茶色の髪がはりついている。

ドアの開く気配に気がつき、ミモリは目をさました。

「おかえり。ギー……どうしても行かないといけない仕事があったんだ」

体を起こそうとしたとたん、ひどい咳がでた。瞳も熱のせいで潤んでいる。

「寝てるよ、終わったから」

「ありがとう。君なら、うん。気がついてくれると思った」

俺はベッドの脇に床にじかに座り、住宅地のラクガキ、それにリースのことについて話をした。

ミモリは目を閉じたままじっと聞いていた。

「レスは納得してくれた？」と、ミモリ。「彼だと思ってたんだ。ずっと僕のことを見ていたしね」

「さあ……どうだろうな。わからないよ。俺には。あんなリースひとつで、そこまでする意味がわからない」

「笑ってさよならしましょう」

「ん？」

「黄色の、小輪の薔薇の花言葉の意味だよ」

「ふうん」と俺は感心してみた。

リースに言われた　レスの最後の言葉の意味がわかった。彼は、彼女の面影を探し、セシルが言えなかつた別れの言葉を見つけたのだ。どんな気持ちだっただろう？　ひどく残酷な、中途半端な気持ちだったに違いない。セシルの別れにレスは答えられない。もう二度と。それとも……でもそれは俺にとって無関係な人間の話だ。

「ミモリ、どうして毎日あんなふざけたことに付き合ったりしたんだ。探偵の仕事といっても、報酬がもらえるわけじゃない」

ミモリは理由はわからないが、微笑み、足もとにいる俺に視線を向けた。

「僕とセシルは似てるんだ」

「似てるって……どこが」

「僕は、誰かに必要とされる人間になりたい」

「え？ 初耳だ」

ミモリは笑うかわりに咳をした。

「きつと彼女もそうだったんだよ。誰にも何も求められないまま、ひとりぼっちで生きるのではなく、まわりの人たちの記憶に残るように、彼らのために何かをしよう、それから去ろう……としたんだ」
「でもミモリは記憶が戻ったわけではないんだろ」

「そうだね。でも同じことだよ。人間はいつまでも地上にいられるわけじゃない。レスも、今は別れがつかいかもしれないけど、いつか必ずわかってくれると思う。だって、僕だったら嬉しいもの。別れるときにはさよならが聞きたい。大切な人が心の底から笑って言うってくれるなら、寂しいけどとても嬉しいことだと思う」

ミモリは他人のことなのにうれしそうだった。

不思議だ。他人のことなのに、自分のことのように感じるなんて。ミモリの機嫌がいいなら、俺も文句はない。体調もよければよかったんだ。

「くだらないよ、ミモリ」と俺は言った。「必要とされるってレスに対してあまり同情的になれない理由がなんとなくわかってきた。

俺は怒っていると思う。とても。

その深い怒りは、古いビデオテープにひそんでいる。

ずたずたに引き裂かれ、くだけ散り、再生もできない無数の残骸の中に息をひそめているのだ。

そして残骸になってしまったのは、自分そのものだ。

「ミモリ……俺はひとりです00キロの荷物を担ぐことができるし、言葉にも困らない。毒物やウイルスにも耐性があつて、風邪ひとつひかない。寒いのも熱いのも平気だ。普通の兵士の何十倍もの仕事ができる。必要無いわけがないだろう？ でも、必要とされるって、それだけのことなんだぜ」

ミモリは目を閉じたまま、何も言わなかった。

僕たちはもつと些細なタイミングで別れてしまっただろう……そのことを教えてくれた誰かは、もう、俺のそばにはいない。

たとえ記憶を取り戻さなくても別れるときが来るだろう。そのときは、できることならば、きれいに消えたいと思う。何も求めることなく、誰からも何ひとつ奪うことはせずに。

俺は立ち上がった。ミモリの手が伸びて、部屋を出ようとする俺の右手首を掴んだ。「ミモリ?」「ミモリの熱をもった手の平が、握手をするみたいに、ぎゅっと俺の手を握る。「どうした? 気分が悪いのか?」

「ギー、大丈夫だよ。僕はね」

大丈夫だよ、とミモリはもう一度呟いた。レスではないが、子どもなのはどちらかわからない。

*

その後、俺はにわかに忙しくなった。というのも、ミモリが風邪を引いた、という情報をききつけたやつらが、いつせいにアパートに押し付けてきたからだ。

まずは病院の仕事に飽き飽きした様子のクレアがワインのボトルをもって現れた。

次にやってきたのはバルガドとリドだ。どうやらふたりは別々にやってきて、アパートの下で偶然かち合ったらしい。信用の置けない話だ。リドは事務所からそのまま来たらしくジャケットの下は制服だった。バルガドはミモリが好き(で自分も好き)なドーナツを大量に、リドはいいにおいのする鳥の丸焼きをまるまる下げてきた。ふたりはマーシャが差しいれてくれたローストビーフとサンドイッチをつまみに、クレアのもってきた酒のみはじめた。

「お前ら、示しあわせてきたわけじゃないだろうな?」

「邪推だね」とリド。

「ワインを取り上げる、そいつは勤務中だ。まったく嫌がらせのつもりか」

クレアがにつこりした。嫌なやつらだ。

そうこうしている内に、料理のにおいを嗅ぎつけた隣人があれこれと立ち寄り、誰かが酒と料理を足し、いつの間にかクリスマスソングのレコードはミモリの部屋でかかっている、ということになった。きわめつけが、昼間しか働かないはずの、ひょうきんな顔をした郵便屋だ。

「ミモリは風邪だよ」

「知ってるよ。バルガドさんがあちこち触れまわってたからね」

「どういづつもりなんだ、非常識だ」

「この間まで倉庫に住んでた君が言うとはね。ミモリだから、集まる口実になるのさ」

「どういづことだって聞いたんだ」

「あいつには世話になってるからさ」

俺は、つい、言葉に詰まった。

「どうした？」

「いや、なんでもない」

「これはお見舞い」

郵便屋が持つて来たのは、ハーブキャンディの大袋だった。一応みんな、見舞いを口実に来るから、甘いものが多い。そこは評価しよう。だが、ワインをこぼしたたの、取り皿が足りないだの、そういったことで俺を東西奔走させるのはいただけない。

「そしてこっちは、お届け物。あいかわらず誰からかは知らない」
そういつて差し出したのは、大きな白いケーキの箱だ。カードが添えてある。

署名は「Leslie」。簡潔に「Merry Christmas as」とある。

「ちくしょう、これで帳消しにしたつもりかよ」

「何か言った？」

「メリークリスマスって言ったのさ」

「メリークリスマス。ところで、うまそうなおいがするな。俺も寄っていったいい？」

「風邪がうつつてもいいならな」

俺はため息を吐いた。

背後で誰かが、パイを切り分けるためのナイフが消えたといつて怒鳴っている。

*

その夜の記憶は新品のテープに保存し、様々な出来事となり置いてある。騒ぎの間じゅう、俺はなぜか走りまわっていたし、ミモリは羨ましそうにみているだけで、その後、風邪を悪化させ、治ったあととひどい咳をしていた。腹の立つことに来客で感染した者はいなかった。

そのときのテープをデッキに押し込むと、ふしぎと過去はセピア色を試してみえる。過去と現在のはきちんと色わけされているのだ。それは俺が、ちゃんと過去を通り過ぎて生きているということかもしれない。そしていつか今を通り過ぎて遠くに去っていく……。そこには色もついていないし、音も無い。景色もないかもしれない。そのときがきたならば、俺というものは、きれいに消えるつもりだ。何も求めずに。誰からも奪い取ったりしない。

ただ、あの夜の後は、俺はテープにしまった、ミモリのために集まったたくさんの人々を眺めながら、こんなことも考えるようになった。去って行く者は残された者にさよならを言わなければいけない。そのことについて。

俺はミモリと別れるとき、どうしたら笑って別れられるだろう？ その答えはたぶん、とても簡単で、ときには困難だ。

書き加えておくならば、ミルドタウンに初雪がふった翌朝、俺は雪かきに出かけた。

これがヒント、そしてひとつの区切り目だ。

こういうことを日記に書くのは、もうこりこりだ。もう二度とやってみようとはしないはずだ。

誰にも伝わらないだろう。それは自分でみつけるべきだ。

たぶん、その答えを探すことが……。

もう、黙っていよう。

よけいなことは言わずに。

大切なことは大声で話すべきではない、ときいたことがある。

臆病者は怒鳴られると遠くに消え去ってしまうのだ。

大切なことは臆病者だ。

たぶんそのとおりだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5040z/>

ミルドタウン 銀色のリース

2011年12月17日00時46分発行